

開 発 雑 感

農薬開発をめぐる最近の動きについて、二、三雑感を記してみたい。その一、開発の原動力が需要に在ることは言うまでもない。今年は、当初減反政策などのために、水稻農薬とくに除草剤が相当影響を受けるものと懸念されていた。最近伝えられるところでは、園芸農薬の伸長や高価格品目への移行に助けられて、数量的に微減、金額的に微増ということで本農薬年度を終りそうである。何れにしろ、国内のみならず世界的にも一部の発展途上国を除いては、農薬消費の高度成長はもはや期待すべくもないであろう。その二、かゝる低成長とはうらはらに、農薬の規制は従来以上に強化されつつある。米国では環境保護庁が安全性評価を中心とするガイドラインの改訂版を提案した。その詳細・広汎さは、まさに恐るべきものである。本案の実施にはなお多くの曲折があろうが、GLP とならんで、国際的なすう勢と覚悟すべきではなかろうか。今後の農薬開発の苦労は並たいていのもではあるまい。農薬規制の国際的調和論がかまびすしい昨今、このような動きは早晩わが国にも波及しそうである。その三、開発が困難化するにつれ、国策としての農薬開発推進が期待されよう。最近の新聞報道によると、厚生省は国産医薬品の開発に公費補助を行い、積極的に参画する方針という。農林水産省にも、難防除害虫対策として同様の施策が実施に移されつつあるが、今後の成果を期待したいものであるし、厚生省の試みも注目し、農薬開発の難しさをしみじみと感じさせられる昨今ではあるが、理性と実利を踏まえた国民的合意を得ながら、農薬開発の真価が発揮されることを願

目 次

(第12巻第9号)

第4回IUPCA国際農薬化学会議
に出席して……………2
＜神戸大学農学部教授 松中昭一＞

国際園芸学会(野菜部会)に出席して……7
＜野菜試験場育種部 山川邦夫＞

1. 会議全般及びオーストラリア
の印象……………7
2. 野菜部門での発表……………8
 - 種子生産……………10
 - 野菜育種……………10
 - 施肥・栄養……………11
 - 植物調節物質……………11
 - 環境調節……………11
 - 品 質……………12
 - 流 通……………13
 - 生産システム……………13
 - 生長・発育……………13
 - 作物保護……………13
3. 見学その他……………14

外国文献抄録……………14

除草剤使用面積一覧表……………15

新登録除草剤一覧……………20
＜農林水産省農蚕園芸局植物防疫課＞

う次第である。

財団法人 日本植物調節剤研究協会理事
クミアイ化学工業株式会社研究開発部長

永江祐治